

# 彌彦神社門前町における観光と土地利用の変化について

## 3 回生 宮崎 結友

### 1. はじめに

日本各地の都市の成り立ちには歴史的な経緯が深くかかわっている場合が多い。国土交通省国土技術政策総合研究所の歴史まちづくりの手引では、「まちの歴史的な成り立ちや都市の構造等の観点から(1)城郭を核として武家地・町人地・寺社地を配した城下町、(2)江戸時代に入り、消費社会の成熟とともに農作物の生産地や鉱業・工業の製造に特化して集住し発展した在郷町、(3)巡礼の旅から物見遊山の旅行や行楽への人々の変化とともに寺社の門前に発達した門前町(鳥居前町)、(4)三都(江戸、大坂、京都)の往来を支えた五街道沿道とともに発展した宿場町、(5)三都と地方との生産品等の物資集積や流通の隆盛により発展した港町(川湊町を含む)、(6)戦国時代より寺院の境内と町から形づくられた寺内町の6つに区分した」<sup>1)</sup>とあるように大きく6つに分けられている。このうち門前町の成り立ちについて、同書では「著名な寺院や神社への参詣客を受け入れるまちとして発展した都市である。門前までの参道があり、参道沿道に参詣客を相手にする宿坊、商工業者が集住した町屋が立地する沿道型のまちなみを構成している。」とある<sup>2)</sup>。さらに、同書では「江戸時代に入り、全国で盛んになった庶民信仰と、五街道をはじめとする街道・往還の整備や宿場町の形成によって、有名な寺社仏閣への参詣といった物見遊山の旅が増え、これら参詣客を相手にする商工業者が集積した都市として繁栄した。」<sup>3)</sup>とあるように、門前町は信仰という面から、次第に行楽客を相手にした商業の場である面を加えて徐々に変化を遂げたことがわかる。

新潟県における代表的な門前町として、西蒲原郡弥彦村の彌彦神社がある。彌彦神社は『弥彦村史辞典』によると、「大字弥彦、弥彦山の東麓に鎮座する越後一宮。正式には『いやひこ』とよばれ、伊弥彦・伊夜彦・伊夜比古などとも記される。祭神は天照大神の曾孫にあたる天香山命。」<sup>4)</sup>とあり、越後国一宮であることから格式高い神社であり、また万葉集にも神社の記述があることから古くから信仰を集める神社である。また、『弥彦村史辞典』には「境内はおよそ13ha(約4万坪)で、…本殿の背後には霊峰弥彦山が聳え…」<sup>5)</sup>とあるように、敷地面積は広大であり、弥彦山という背後の山を神体として祀っている。この彌彦神社の門前町には、温泉旅館、土産品店などが集積しており、弥彦村は観光の村として発展を遂げてきたという歴史がある。そこで今回は彌彦神社門前町を研究対象地域として論じたい。

門前町を取り上げた論文としては、成田山新勝寺表参道の商店の業種変遷と景観整備について述べた橋本ほか(2010)の「成田山新勝寺門前町における街並み整備と商業空間の変容」

6)や、宇佐神宮門前町の土地利用とヒアリングから門前町観光の実情を述べた小堀(2001)の「宇佐神宮における門前町の地域生態と観光動態」7)などが挙げられる。しかしながら門前町そのものを取り上げた論文は少なく、近年では特に門前町の景観の変化を取り上げた論文が少ない。そこで本稿では、まず近年の弥彦村における観光動態を踏まえた上で、彌彦神社の門前町における商店や宿泊施設の立地の変遷、景観の変化が顕著に表れているこの20年間を取り上げて、どのような空間変化を遂げたか、どのような変遷を辿ってきたかを分析、研究する。また調査方法は住宅地図とヒアリング調査の結果を用いることとする。

## 2. 弥彦村の観光の特徴

### 1) 弥彦村の観光客の動態

彌彦神社の門前町を中心とした観光について述べる前に、弥彦村の概要について述べておきたい。『弥彦村史辞典』によると「弥彦村は新潟県のほぼ中央部、蒲原平野の西に位置する。西は霊峰弥彦山(638m)を隔てて新潟市、長岡市、東は西川を隔てて燕市、南も燕市にさらに北は新潟市にそれぞれ接している。(略)新潟・長岡の中心部へも車で1時間の距離にある。」8)とあるように、新潟県内でも新潟市と長岡市という比較的大きな都市にも近く、鉄道もJR東日本弥彦線の駅が村内に弥彦駅と矢作駅の二つが立地している。また弥彦村は1901(明治34)年に弥彦村・桜井郷村・矢作村の三つが合併してできた村であり、彌彦神社の周辺は合併前の弥彦村にあたる地域である。この合併ののち今日まで弥彦村は一度も合併することなく、単独の道を歩んでいる。

次に弥彦村の観光の特徴をいくつか図表を提示して述べたい。図1は弥彦村の観光入込客数の推移を2000年から2014年までグラフにしたものである。注釈のように、統計元の新潟県の観光統計の統計方法が2009年までと2011年から異なることと、2011年度までは年度(4月から翌年3月まで)での集計だが、2012年からは暦年(1月から12月)での集計へと変化している。これらのことから、一概には連続したデータであるとは言えないが、弥彦村の長期的な観光客数の推移を示すものとしてここでは提示することとする。図1をみると、2010年の観光入込客数は他の年に比べると低くなっていることが読み取れる。明確な理由は不明であるが、統計方法の切り替えのためではないかと推測する。また2004年度は新潟県中越地震の影響が出たと考えられるものの、2004年度及び2010年を除けば、安定的に推移しているといえる。

図2は2015年の弥彦村の月別の観光入込客数のグラフである。最も観光客数が多い月は11月となっている。11月に観光客が最も多い理由は、彌彦神社内では11月に菊まつりというイベントがあり、さらにこの時期は紅葉のシーズンと重なることから、彌彦神社の外苑にある弥彦公園では美しい紅葉を楽しむことができるためであることが分かった9)。次に多いのは1月であるが、その理由としては、彌彦神社は新潟県内でも有数の初詣客数を誇る神社であり、新潟県公式観光サイトにいがた観光ナビの新潟県初詣スポットホームペ

ーじによると、近年の彌彦神社の初詣の人出は約 24 万人で、記載されている神社の中では

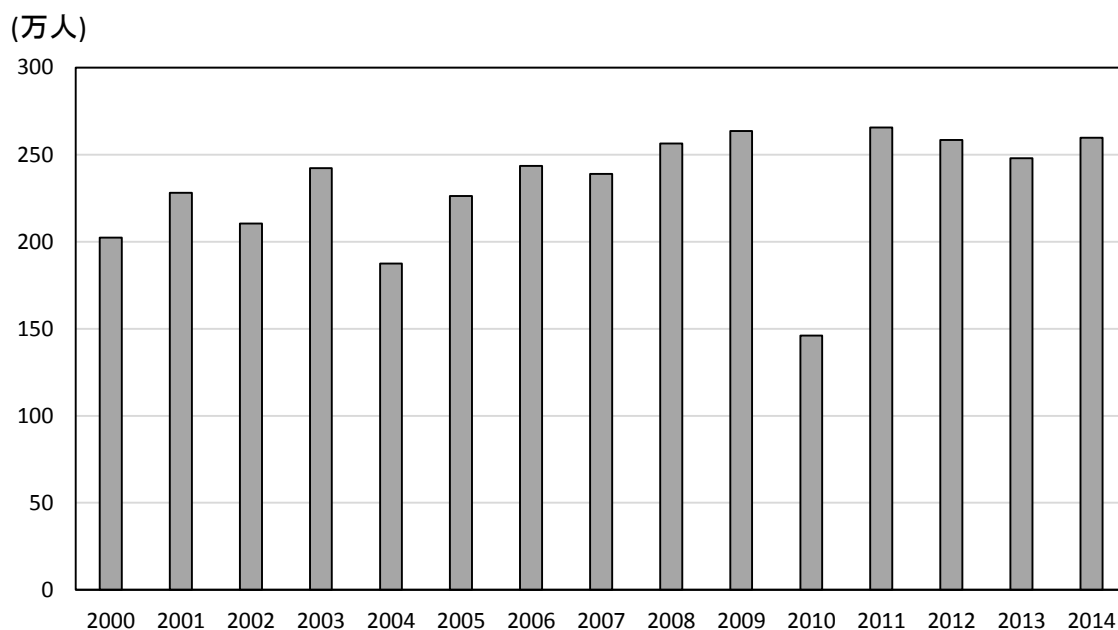


図 1 弥彦村における観光入込客数の推移

(新潟県観光動態及び新潟県観光入込客数統計より作成)

注)統計方法は 2010 年以前と 2011 年以降で異なる。また、2011 年以前は年度、2012 年以降は暦年による集計。

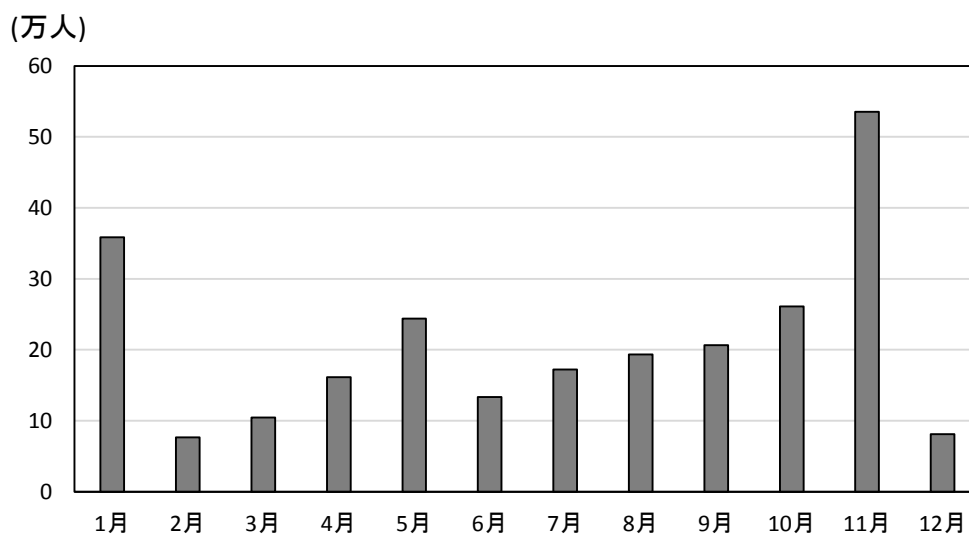


図 2 弥彦村における月別観光入込客数 (2015 年)

(弥彦村観光商工課データより作成)

(万人)

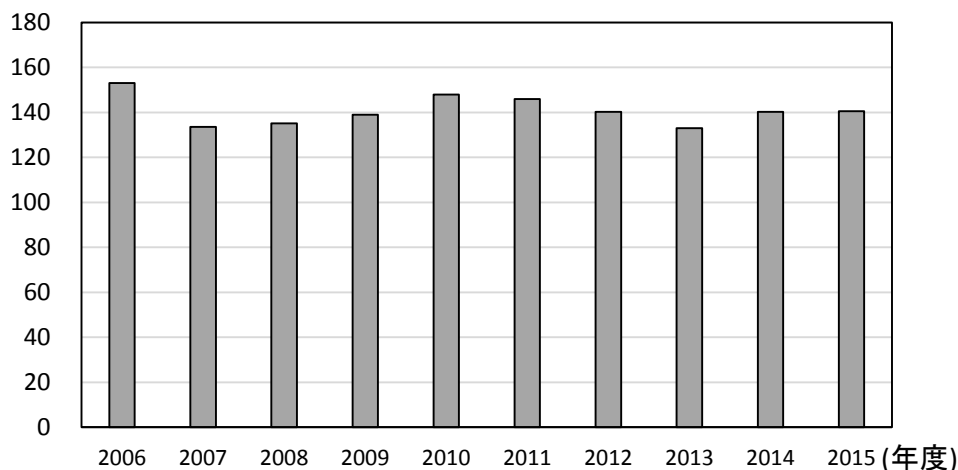


図3 彌彦神社の入込客数の推移  
(彌彦村観光商工課提供資料より作成)

最も多く、次に多いのは新潟市の新潟総鎮守府白山神社の約17万人となっている10)。このことから彌彦神社の初詣客が多いという特徴が、村の観光客数の増減に結びついていることから、門前町としての特徴が表れていると考えられる。

図3は彌彦神社の入込客数を2006年度から2015年度までグラフにして示したものである。これを見ると毎年120～140万人の入込客数があり、多少の増減はあるものの安定して、彌彦神社を訪れる人が一定数存在していることがわかる。彌彦神社の入込客数が安定している理由としては、車で新潟や長岡から約1時間で来ることができるという立地の良さと、格式ある神社ということから『彌彦村史事典』には、彌彦神社に毎年参詣する集団、彌彦講が新潟県内に存在することが書かれていることから、多くの新潟県民から信仰を集めていること、県内での知名度の高さなどによって、一定数の観光客が訪れていると考えられる。

また、図4は彌彦山への入込客数の推移を示したグラフである。2006年度から比較すると10～20万人増加していることが読み取れる。彌彦山は標高が638mで、初心者でも手軽に登りやすい山であり、またロープウェイが設置されているため、山麓駅から山頂駅までおよそ5分で到着することもできるという特性もあり、最近では登山人気の高まりとともに登山者が増加しているとのことであった11)。また、出勤前に車で麓まで来て、登山をして降りた後に仕事に向かうという人もおり、習慣的に山を訪れる人がいることもわかった12)。彌彦山トレッキングをする人のために、彌彦駅では2015年にトイレ内に更衣室を設

けたり、洋式に変更したり、また登山で汚れた靴をあらうことができる靴洗い場を新設するなど、登山者への配慮がなされるようになっており、これらの弥彦駅のリニューアルは観光客のニ

(万人)

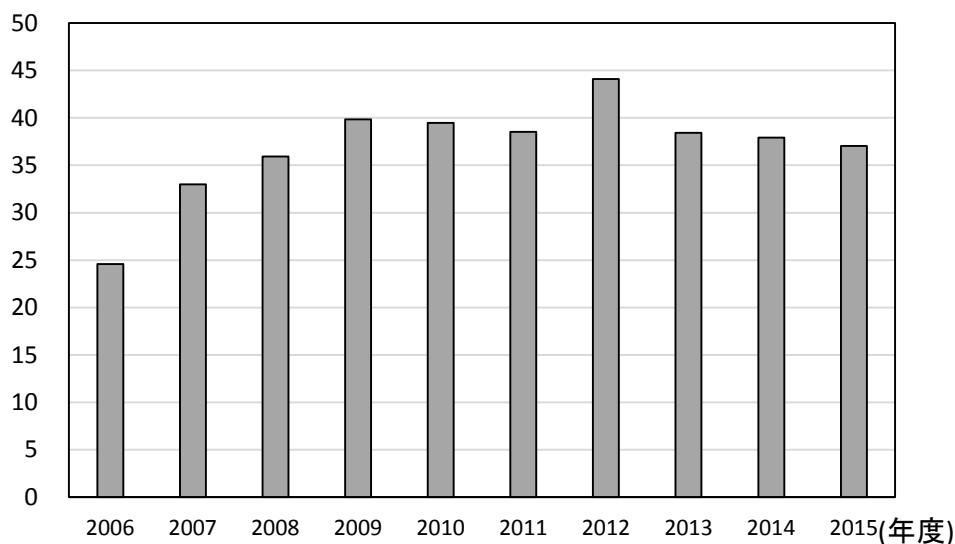


図4 弥彦山の入込客数の推移  
(弥彦村観光商工課提供資料より作成)

(万人)

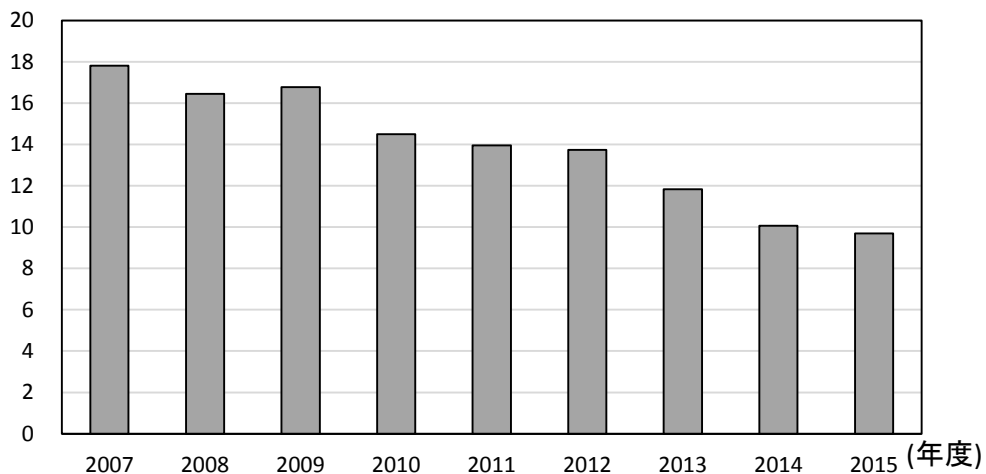


図5 弥彦温泉の宿泊客数の推移  
(弥彦村観光商工課提供資料より作成)

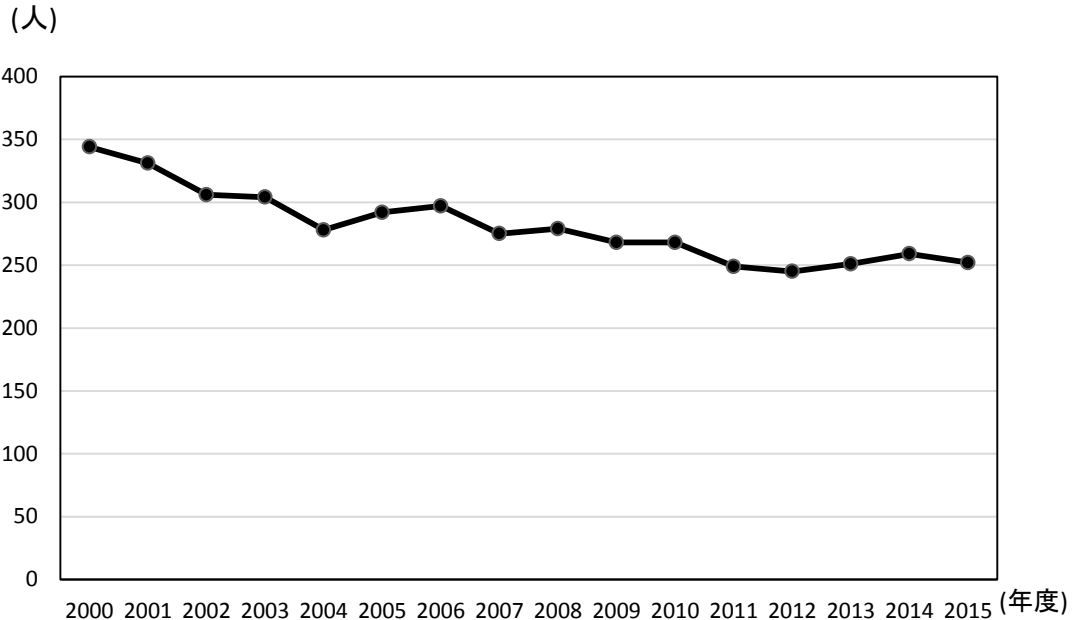


図 6 弥彦駅一日平均乗員人数の推移  
(JR 東日本ホームページより作成)

ーズに合わせた変化であると考えられる。このように山を訪れる人が増加しているが、それが駐車場近くの土産店に立ち寄る可能性が増えたと考えることはできるが、あくまでも日帰り利用のみにとどまると考えられる。

図 5 は弥彦温泉への宿泊客数の推移を示したものであるが、ここでいう弥彦温泉とは以前から弥彦門前町周辺の旅館が使用していた源泉が湯量不足により、2007 年に新たに開削した「湯神社温泉」という源泉を使用している旅館やホテルへの宿泊客数のことを指している。これを見ると、弥彦温泉への宿泊客数は減少傾向にあると読み取れる。明確な理由は不明であるが、宿泊するよりも日帰りで訪れる観光客が多くなったことや、いくつかの宿泊施設の閉業によるものだと考えられる。

図 6 は弥彦駅の一日本平均乗員人数の推移を示したものである。乗員人数とはその駅から乗車した人数を示すものであるため、一概には JR を利用して弥彦門前町を訪れた人数とは言えないが、2000 年度から 2015 年度までを比較すると、若干減少しているがさほど大幅に減少しているという訳でなく長期的に見るとあまり変化がなく推移している。ちなみに、スキー観光地として有名な越後湯沢駅の 2015 年度の定期外利用は 2,611 人となっていることから、弥彦駅はそれに比較してはるかに少ないことを考えると、現在では JR 弥彦駅は弥

彦観光にそれほど大きなインパクトを与えていないのではないかと考えられる。

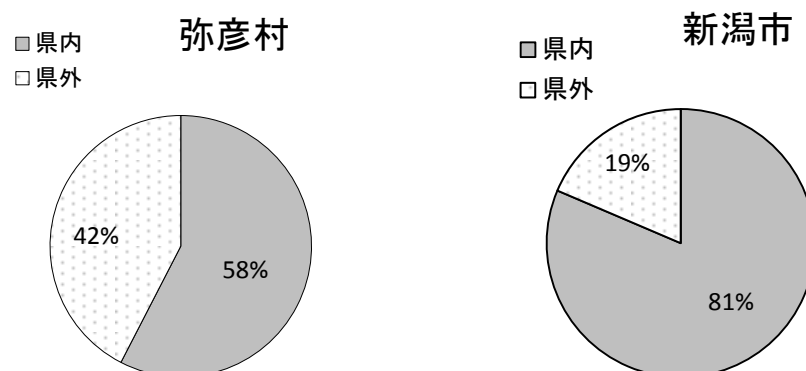


図7 弥彦村と新潟市における発地別の観光客割合（2009年度）  
（新潟県観光動態より作成）

図7は2009年度の弥彦村と、県内で最も観光入込客数が多い新潟市を事例として、観光客の発地の県内県外割合を示したものである。新潟県の観光に関する統計方法が変更になったため、市町村別の観光客の発地がわかる最も新しいデータが2009年度であるため、この年度のグラフとなっている。このグラフを見ると、新潟市は県内からの観光客が81%で県外からは19%にとどまっているが、弥彦村では県内が58%で県外からは42%と、県内からの観光客の割合が若干多いものの、県外・県内の割合がほぼ半々という特徴がある。また、県内の他の市町村では、長岡市は県内が74%、県外が26%で、県内が多く、一方の湯沢町では県内が19%で県外が81%と県外からの観光客がかなり多いことがわかり、また妙高市では県内が45%、県外が55%と県内と県外がほぼ近い割合ではあるものの県外がわずかに上回るという特徴があり、他の市町村と比べてみるとその地域ごとに県内・県外の割合に特徴があることがわかる。彌彦神社の近くでお店を営む人になぜ弥彦に店舗を構えたのかという理由についてヒアリングしたところ、「弥彦は県内の人も県外の人も両方から来てもらえる土地だから」とおっしゃっていたので、県内・県外の人からバランスよく訪れてもらえる観光地であることがわかる。

## 2) 弥彦村の観光の歴史

表1は弥彦村の観光や弥彦神社に関する重要な出来事を年表にしたものである。年表の始まりは大正時代であるが、それ以前から弥彦は彌彦神社の門前町として参拝客を迎え、

旅館が立ち並ぶ地域であった。1912年に起きた弥彦大火では彌彦神社と周辺32戸が焼失し、1916年に彌彦神社は再建されて遷座することとなる。また同じく1916年には当時の越後

表1 弥彦村観光に関する主な出来事

年	できごと
1912	弥彦大火で弥彦神社をはじめ32戸焼失
1916	越後鉄道弥彦支線いわゆる参宮線(現在のJR弥彦線)が開通
	彌彦神社が再建、遷座
1918	越後鉄道社長によって弥彦公園の造成はじまる
1958	弥彦山ロープウェイが完成。山頂に展望ビル
1960	岩槻包帯工場が工場建設際に掘った深井戸から噴出した温泉を各旅館に配湯
1999	駅前の「ニューやひこ観光ホテル」が廃業
2001	彌彦神社平成大修営完成
2005	大正レトロ調の弥彦観光パンフレット完成
2007	「湯神社温泉」弥彦温泉給湯協同組合に給湯開始
2010	パワースポットブームで若い女性客が増加
	「白パンダ焼き」がニッポン全国物産展に出品されて一位獲得
2011	東日本大震災後に観音寺温泉が枯れる。弥彦温泉にも風評被害
2014	「弥彦グランドホテル」が廃業
2015	駅前の廃墟ホテル見学ツアーが村主催で開催
2016	彌彦神社御遷座百年事業行われる

(弥彦村史事典と新聞記事より作成)

鉄道弥彦支線が開通することになり、現在のJR弥彦線の前身となる鉄道が敷設された。弥彦一帯を一大観光地にしようと越後鉄道によって開発が行われることになり、1918年には弥彦公園の造成が始まった。弥彦公園は美しい庭園と四季により様々な景観が楽しめる公園であり、『弥彦村史事典』によると、「双丘の谷には橋を架けて『観月橋』と名付け…紅葉の美しいもみじを植えて『もみじ谷』と呼ばれ親しまれている。」<sup>13)</sup>とあるように弥彦公園は紅葉の名所として現在も楽しまれている。

1958年には弥彦山ロープウェイが完成したが、これによって弥彦山頂まで約5分で到着することが可能になり、また山頂に完成した展望ビルでは景色を楽しみながら食事できるレストランやお土産店などがあり、観光スポットとなっている。

そして1999年駅前にあった比較的大きな規模の「ニューやひこ観光ホテル」が廃業した。その後長期間ホテルの建物は放置されていたが、廃墟として侵入者が絶えないことから村



が主催して 2015 年には廃墟見学ツアーが行われた。しかし、今後「ニューやひこ観光ホテル」跡地は更地にしたのちに公園にする計画があるとのことなので、駅前の利活用が期待されている。

2001 年には彌彦神社が平成大修営を終え、2005 年は大正レトロ調の弥彦観光パンフレットが完成した。この当時は「弥彦浪漫」をキャッチコピーとした取り組みが主に行われていて、レトロな雰囲気なパンフレットが作成された。現在の観光パンフレットは当時の物も引き継ぎつつ、作成されている部分もあるとのことであった。

次に、弥彦の温泉についてであるが、弥彦村には弥彦地区の弥彦温泉と、観音寺地区の観音寺温泉と桜井郷地区の桜井郷温泉の 3 つの温泉が存在する。弥彦温泉は旅館やホテルに配湯されているが、桜井郷温泉は日帰り温泉施設のみ入浴できる。一方の観音寺温泉についてであるが、観音寺温泉の歴史ははるか 1000 年前にさかのぼるといわれ、『弥彦村史事典』を引用すると、「応徳元年(1084)には観音寺集落に湯脈の連なりが発見されるに至ってにわかには栄えたという。」<sup>14)</sup>とあり、かなり古くから存在していた温泉であって、旅館も何軒かあった。しかしながら年表にあるように 2011 年の東日本大震災発生によって源泉が止まってしまい、旅館は廃業に追い込まれたり、廃業を免れても成分的に温泉の条件を満たしていない鉱泉を使用するしかない状況となった。その時に弥彦温泉はなんら地震の影響は受けていないにもかかわらず、風評被害で観光客が一時的に減った。なお、2011 年 5 月 2 日朝日新聞新潟版記事「東日本大震災余波、温泉枯れる弥彦温泉街の源泉の一つ、旅館廃業や源泉変更」によると、現在は観音寺地区の旅館は一軒のみとなっている。

2007 年の湯神社温泉給湯開始という項目は、弥彦温泉で使用されてきた源泉は 1960 年に当時の岩槻包帯工場が工場を建設する際に掘った深井戸から噴出した温泉を各旅館に配湯したことが弥彦温泉としてのはじまりで、その後施設の老朽化などによって新たに源泉を探したところ、1972 年に観音寺長生館源泉を加熱して配湯することになり、村も新たに配湯施設を設けて配当することになった。その後は 2006 年に弥彦公園内に新たな温泉を掘り当てたことによって、ここを「湯神社温泉」と名付けて、弥彦の旅館に配湯することになり、現在は彌彦神社周辺の旅館やホテルは湯神社温泉の源泉を使用している。

2010 年にはパワースポットブームによって若い女性などが主に神社といったパワースポットとよばれる場所に訪れることが流行したため、観光客も増えたということであり、図 3 でもそれが現れている。また、同じ年の「白パンダ焼き」というのは分水堂菓子舗という店舗が販売している米粉を使った白い生地の中にあんこや村特産の枝豆である弥彦娘を使ったあんを入れたパンダの形のお菓子であり、ニッポン全国物産展というイベントに出品して 1 位を獲得することによって人気になり、ご当地グルメとして人気を集めている。

2014 年には、弥彦駅から彌彦神社に至る道沿いに立地していた比較的大きなホテルである「弥彦グランドホテル」が廃業した。現在この跡地は更地になって、その敷地の一部が「さやや」という弥彦村の野菜などの特産品直売所となっている。そして村によると、今後この跡地を 3 か年計画で直売所から農家レストランへと進展させていく予定があるとい

うので、今後門前町の再生に期待できる動きである。また 2016 年の彌彦神社御遷座 100 年事業というのは、1916 年に再建された彌彦神社の御遷座からちょうど 100 年を記念して、落語やコンサート等が開催されたことである。

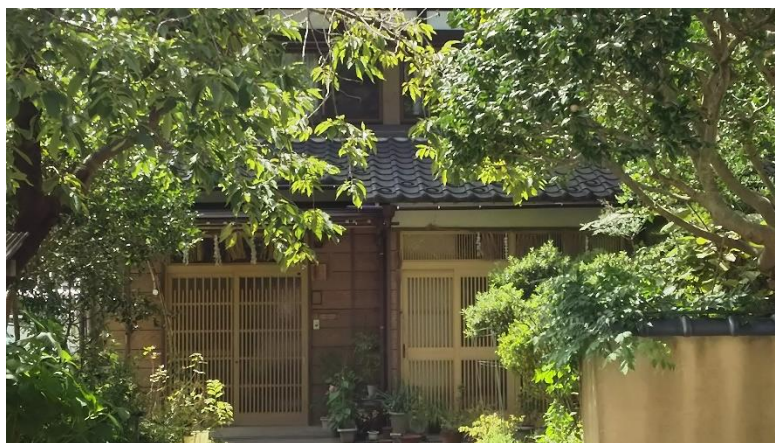


写真 社家通りの民家の一例 (2016 年 9 月 著者撮影)

### 3. 彌彦門前町の土地利用の変化

彌彦神社は門前町を形成しているが、現代において門前町の範囲を厳密に設定することは難しい。かつて彌彦門前町は、彌彦駅から彌彦神社に至るルートに発展し、旅館・ホテル・土産物店などが立ち並んでいたことから、本稿では、門前町の調査範囲として彌彦駅から彌彦神社一の鳥居に至る道路である停車場通りと外苑坂通り、神社通りと、彌彦神社に平行に伸びる社家通りと土産物店が立ち並ぶ通りといったこれら 4 つの通りに面した範囲を「門前町」として設定することとした。

図 8、9、10 は 1997 年、2006 年、最新版である 2016 年のゼンリンの彌彦村の住宅地図を用いて、調査範囲の通りに面した土地がどのような用途で使用されているかを調査し、それを凡例ごとに色分けして塗ったものである。2016 年は現地調査もあわせて実施した。表 2 は地図から土地利用の変化を示したものである。また地図中のⓅは駐車場を示す記号として用いた。

まずどの年の地図にも共通して言える門前町の特徴としては、社家通りと神社通りの南側に立地している民家の存在である。そもそも「社家通り」の名前の由来は、神社の神職が住んでいたため、そのように呼ばれているのだという。また社家通りの民家を観察すると、玄関にはしめ縄がかけられていたり、家の前に門があつて、住居と門が離れていたり、今もその社家特有の民家の特徴が色濃く残されていることが確認できる (写真)。

彌彦温泉観光旅館組合へのヒアリングによると、神社通りの南側の民家も、社家通りほど特徴がある民家ではないが、この地域の民家も社家通りと同じく先祖が神職であったといわれる。現代に至っても門前町らしい景観の特徴が、それぞれの家で短冊状の地割という景観に見受けられる。

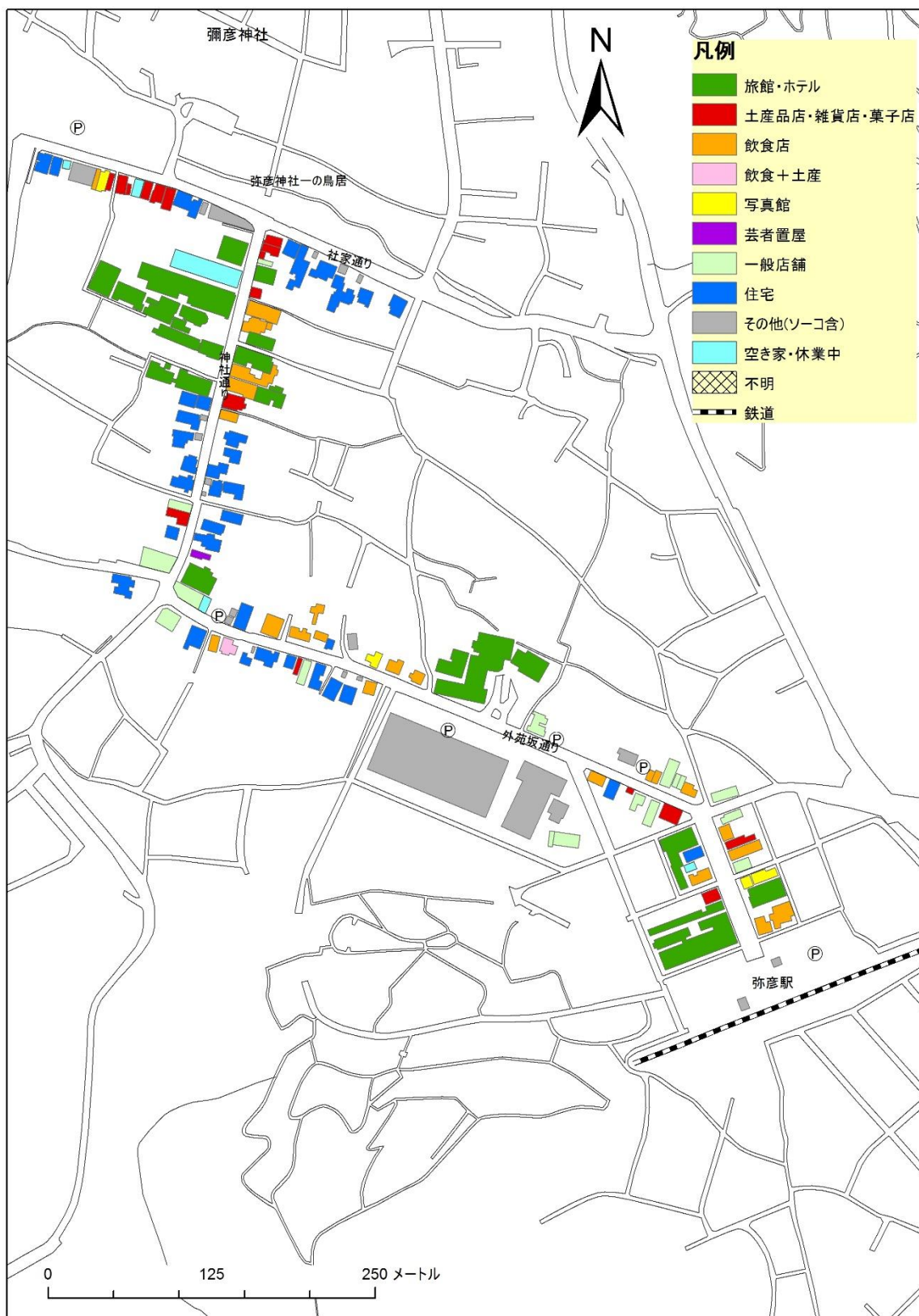


図8 1997年における弥彦駅前町の土地利用  
 (ゼンリン住宅地図をもとに筆者作成)

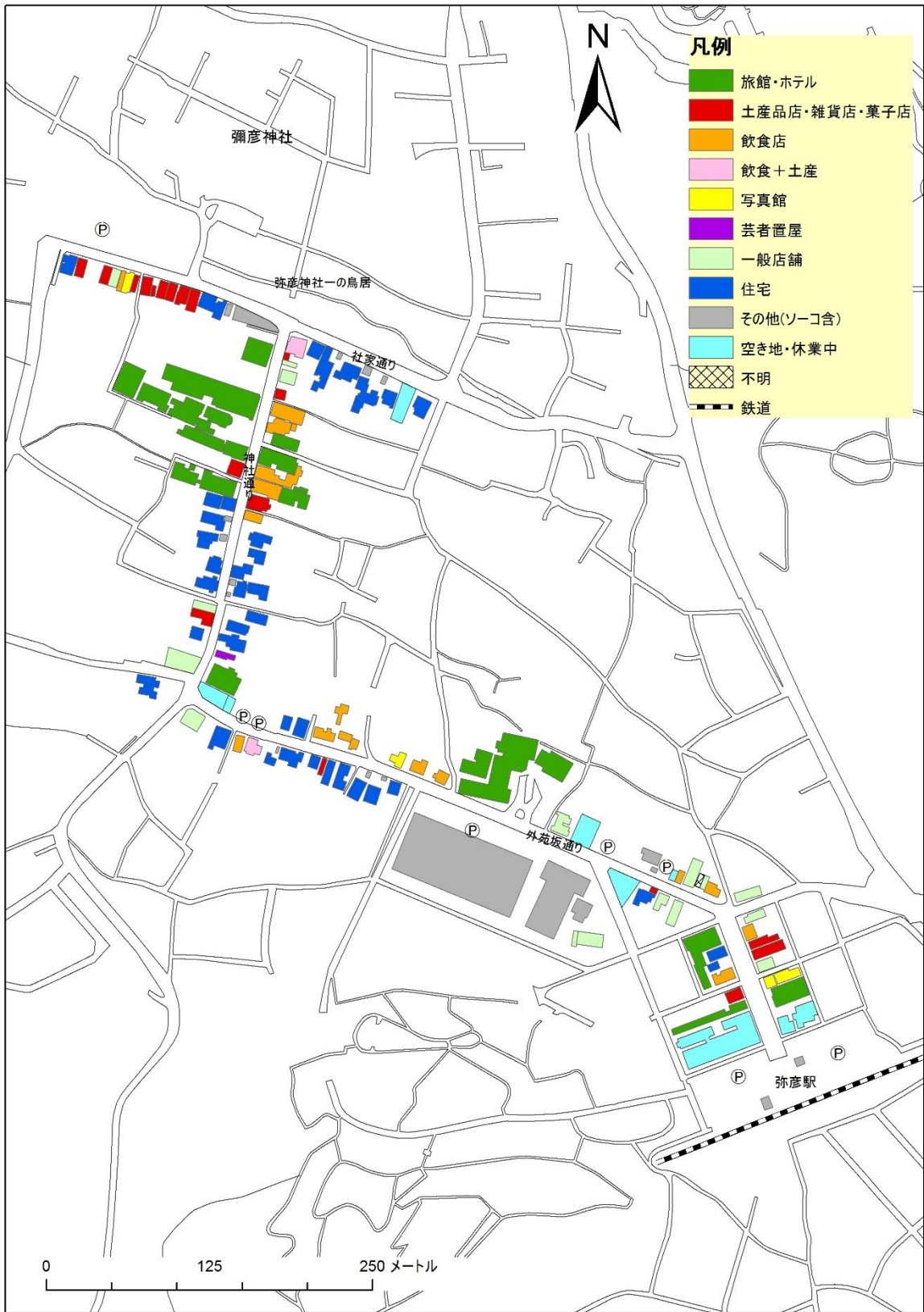


図9 2006年における弥彦駅前町の土地利用  
(ゼンリン住宅地図をもとに筆者作成)

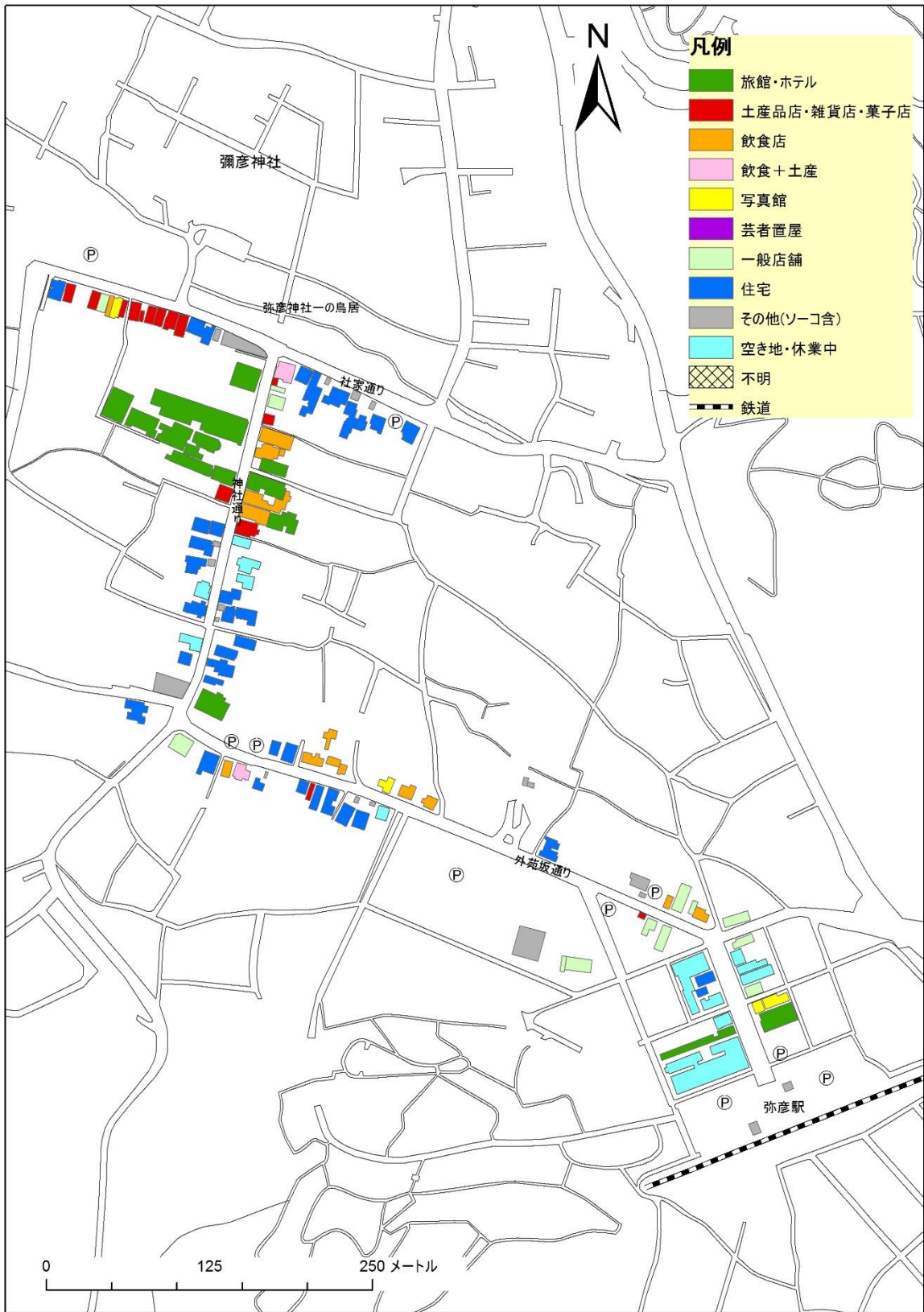


図 10 2016 年における弥彦門前町の土地利用  
(ゼンリン住宅地図及び現地調査をもとに筆者作成)

表2 弥彦門前町の土地利用の変遷

	1997年	2006年	2016年
宿泊施設	15	13	10
土産品店、雑貨店、菓子店	17	18	15
飲食店	21	15	12
飲食店＋土産品店	1	2	2
写真館	3	3	3
芸者置屋	1	1	0
一般店舗	16	15	12
住宅	34	36	32
その他(ソーコ含む)	21	19	18
空地、休業中	5	8	13
不明	0	1	0

(図 8,9,10 をもとに作成)

また、2016年の地図作製の際に、神社通りの旅館や一般店舗の跡地が「彌彦神社御旅所」と記載されていることを確認した。これについて、現地で聞き取り調査を行ったところ、神社通り周辺で彌彦神社が空地を買い取って、「御旅所」として活用しているという話があった。つまり、門前町の景観保全に神社が積極的に関与していることが分かった。

また、通りごとの特徴としては、彌彦神社のすぐ近くの駐車場の南側には土産品店が多く立地していて、車で神社を訪れた観光客が土産品店を買いやすいことから、ここに土産品店が多いのではないかと考えられる。一方で神社通りの北半分は旅館が数多く並んでいて、南半分は民家が多いという特徴がある。神社通りの北半分に旅館が多いのは、神社通りの北半分は社に近接しており、ここに神社を訪れる参拝客が宿泊するからだと考えられる。

次にこの3つの地図を比較して言えることを述べたい。まず大きな変化としていえるのは1997年には駅前通りには「やひこニュー観光ホテル」を始めとして旅館・ホテル、そして飲食店も多くあったが、2016年の地図を見ると、次第に空き家や休業中の店舗が増えていることがわかる。表2を見ても、宿泊施設数は1997年には15軒、2006年には13軒、2016年には10軒と減っているが、停車場通りだけに限定して言えば宿泊施設数は1997年には5軒あったものの、現在では2軒になった。停車場通りでは空地の数も1997年には0であったが、2006年には2ヶ所になり、2016年には飲食店や土産品菓子店の閉業などにより、7ヶ所に増加している。1997年にあった駅前店舗の一例として、1997年当時に駅前に立地していた「笹屋駅前支店」という店舗はヒアリングの結果、お土産屋であったこと

がわかった。それも神社近くの笹屋旅館という旅館の屋号を使って、その親戚が営業していたことがわかった。

外苑坂通りの緑の建物は先ほどの年表の「弥彦グランドホテル」であるが、2006年の地図にはあるが、2016年の地図には小さな灰色の四角い建物のみになっている。この建物は前述の直売所「さやや」である。「弥彦グランドホテル」の跡地の南側は、大きく変化している。これは村の体育館やテニスコートなどがここから移転して、跡地は多目的ホールと駐車場となり、2006年までは駅前にあった観光案内所がここに移転したことを示している。1997年と2006年の地図にはあった芸者置屋は現在民家になっている。これは門前町の歓楽街的な機能が消滅したことを示している。

また、大きくみると、彌彦神社から半径200m程度の地域では小規模ながら老舗の旅館は若干減少したものの、今も維持されているのに対して、駅前では旅館が廃業あるいは休業したり、飲食店が廃業しているといえる。このことから、鉄道を利用して彌彦神社に観光するというスタイルから自家用車で訪れることが多くなっていくにつれて、より彌彦神社に近い場所では集客力が高いことから、旅館や飲食店の営業が維持できているのではないかと考えられる。また、大規模なホテルが2つとも廃業していることから、団体旅行から個人旅行へと移り変わる時代の流れの中で、大規模なホテルは営業が成り立たなくなり、旧来からの老舗旅館あるいは小規模旅館やホテルが維持されているということが推測できる。

#### 4. おわりに

彌彦神社門前町がこの20年間にどのような空間変化を遂げたか、どのような変遷を辿ってきたかを様々な方法で分析してきた。結論として、第一に、駅前の地区と彌彦神社に近い地区を比べると、駅前の地区は「ニューやひこ観光ホテル」の廃業やその他宿泊施設の休業、飲食店の廃業などによって建物自体の数が減ったり、建物は存在しているものの実際には休業などで活用されていないのに対して、彌彦神社周辺の地区は神社通り南側で空き家が増えてはいるものの、土産品店や飲食店の数はあまり変化がなく、旅館も数軒は廃業しているところもあるが、基本的には門前町観光地としての基本的な機能を維持した状態であることが分かった。この結果から、鉄道で観光に来る人が減少したこと、あるいは団体旅行が減って個人旅行が主体となる流れに代わってきたことによって、より少人数で彌彦神社周辺のみを観光するようになったのではないかと考えられる。

浦(2006)「温泉観光地における個宿の経営動向」15)によると、個宿の経営動向の特徴として、「①家業としての旅館経営、②女将の存在、③リーズナブルな料金体系、④料理商品の工夫、⑤行き届いたサービス、⑥宿泊客主体の経営、⑦小間客が対象、⑧貸し切り可能な温泉浴室、⑨静か、のんびり、安心、⑩オンリーワン路線」としており、また個宿のセールスポイントとしては「最大の売り物としては顧客の立場では我が家のような気楽さ、

名物料理、お金の仕掛けが見えない素朴さなどであろう。」とされている。これらのことは弥彦温泉の旅館やホテルにも言えることであり、小規模な宿泊施設は経営規模的には限度があるとしても、個々の宿泊施設の工夫次第でリピーターを得ることが可能であるため、大規模な宿泊施設に比べて宿泊客に寄り添ったサービスが展開できることから、弥彦温泉では小規模な宿泊施設がこの20年間で維持されてきたのではないかと考えられる。

第二に、2016年の地図では彌彦神社が空地を買い取っている神社通りの旅館や一般店舗の跡地が「彌彦神社御旅所」と記載されていたが、彌彦神社が景観保全に一役を買っていることを示しており、弥彦門前町では彌彦神社との関係性が非常に強いと考えられる。これらのことは、弥彦門前町の観光は日帰り客が多いものの彌彦神社から近い範囲は土産品店や旅館が維持されているということとともに、門前町の景観を考える上で重要であると考えられる。

一方で駅前では空き店舗や空地が多いため、今後村では駅前の「ニューやひこ観光ホテル」の跡地を更地にして公園として利用する計画や、弥彦グランドホテルの跡地に建設予定の農産物直販所や農家レストラン計画が行われることになっている。それによって、彌彦神社のごく近隣だけでなく、駅前の方にも観光客が立ち寄れる場所ができると、車で来た観光客もそちらまで足を延ばしたり、鉄道で弥彦を訪れる観光客が増加することになり、弥彦駅と神社との間の道路沿いが再び門前町として再生することが期待できる。

弥彦には彌彦神社だけでなく弥彦山や弥彦公園といった観光資源が存在しているので、今後もこれらも観光客を呼ぶ材料の一つとなることも考えられる。また、社家通りや神社通りなどのレトロな門前町の景観、近年のパワースポットブームをいかしたまちづくりをさらに強化すること、さらには弥彦門前町の魅力を、今後は新潟県内だけでなく、全国に発信することなど、様々な観点から弥彦をPRしていくことで、門前町観光地として今後もさらに発展していくのではないかと考えられる。

#### —付記—

本稿を製作するにあたり、弥彦村観光商工課の丸山竜一氏、弥彦温泉観光旅館組合長の河村信之氏、弥彦おみやげ処西沢商店の西沢哲司氏、TAKU GLASSの野澤拓自氏、旅館・お食事処「清水屋」のみなさま、農作物直売所「弥彦さやや」のみなさまにはお忙しい中大変お世話になりました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

#### —注—

- 1) 阿部貴弘・松江正彦・曾根直幸 2013 歴史まちづくりの特性の見方・読み方 『国土交通省国土技術政策総合研究所 国総研資料 第723号 歴史まちづくりの手引き(案)』、国土交通省国土技術政策総合研究所、p.14。
- 2) 前掲 1) p.15。



- 3) 前掲 1) p.22。
- 4) 弥彦村教育委員会 2009 『弥彦村史事典』、弥彦村、p.7。
- 5) 前掲 4)。
- 6) 橋本暁子・齋藤譲司・亀川星二 2010 成田山新勝寺門前町における街並み整備と商業空間の変容、地域研究年報 32 号、pp.1-41。
- 7) 小堀貴亮 2001 宇佐神宮における門前町の地域生態と観光動態、地域社会研究 4 巻 pp.19-33。
- 8) 前掲 4) p.6。
- 9) 弥彦村観光商工課へのヒアリング調査による。
- 10) 「新潟県公式観光サイトにいがた観光ナビの新潟県初詣スポット」ホームページ。
- 11) 前掲 9)。
- 12) 前掲 9)。
- 13) 前掲 4) p.287。
- 14) 前掲 4) p.283。
- 15) 浦達雄 2006 温泉観光地における個宿の経営動向 大阪明浄大学紀要 6 巻 pp.9-18。

—参考文献—

- ・阿部貴弘・松江正彦・曾根直幸 2013 歴史まちづくりの特性の見方・読み方  
『国土交通省国土技術政策総合研究所 国総研資料 第 723 号 歴史まちづくりの手引き (案)』、国土交通省国土技術政策総合研究所、  
<http://www.nilim.go.jp/lab/bcg/siryoutnn/tnn0723pdf/ks072307.pdf>  
(最終閲覧 2016 年 12 月 22 日)
- ・弥彦村誌編纂委員会 1971 『弥彦村誌』、弥彦村
- ・弥彦村教育委員会 2009 『弥彦村史事典』、弥彦村
- ・新潟県公式観光サイト にいがた観光ナビ 新潟県の初詣スポット(最終閲覧 2016 年 12 月 22 日) <https://www.niigata-kankou.or.jp/oshirase/14121201.html>
- ・新潟県 観光統計情報(最終閲覧 2016 年 12 月 22 日)  
<http://www.pref.niigata.lg.jp/koryu/1245960085415.html>
- ・JR 東日本 各駅の乗員人数 2015 年度(最終閲覧 2016 年 12 月 22 日)  
<http://www.jreast.co.jp/passenger/>
- ・朝日新聞(2010 年 12 月 7 日,新潟全県・29 頁) 「パワースポット・弥彦神社、地元活気も呼ぶ 若い女性客が増加」
- ・朝日新聞(2011 年 2 月 13 日,新潟全県・31 頁) 「白パンダ焼き、弥彦を元気に 地元の味、『全国 1 位』」
- ・朝日新聞(2011 年 5 月 2 日,新潟全県・23 頁) 「東日本大震災余波、温泉枯れる 弥彦温泉街の源泉の一つ、旅館廃業や源泉変更」

- ・朝日新聞(2015年11月1日,新潟全県・27頁)「廃墟ホテル、怖々探検 弥彦村約130人参加」
- ・橋本暁子・齋藤譲司・亀川星二 2010 成田山新勝寺門前町における街並み整備と商業空間の変容 地域研究年報 32号 pp.1-41
- ・小堀貴亮 2001 宇佐神宮における門前町の地域生態と観光動態 地域社会研究 4巻 pp.19-33
- ・浦達雄 2006 温泉観光地における個宿の経営動向 大阪明浄大学紀要 6巻 p9-18